



医療連携病院紹介

～耳と聞こえの専門クリニック～



「耳ときこえの専門クリニック」（さいたま市浦和区・北浦和）は、最新の検査・リハビリ設備と専門医の高度な知見を融合し、難聴ケアを包括的に提供する専門医療機関です。当院では、耳鼻咽喉科専門医、補聴器適合判定医、認知症サポート医がそれぞれの専門性を発揮し、難治性の中耳炎や術後耳の処置、APD/LiD（聴覚情報処理障害/聞き取り困難症）の診断から、MRI 画像を用いた VSRAD（早期アルツハイマー型認知症診断支援システム）解析まで、高度な専門性を要する臨床実践を行っております。

当院の臨床の核となるのが、先進的な設備環境を駆使した精緻な聴覚評価とリハビリテーションです。補聴器のフィッティングにおいては、外耳道内の鼓膜面音圧を直接測定する「実耳測定（REM）」を導入し、個々の解剖学的特性に合わせた「脳に届く音」を科学的に調整しています。さらに、防音室内には 3D 音源および多音源システムを完備し、騒音下での会話や複数人でのやり取りといった実生活の複雑な音環境を再現した、実践的な聴覚リハビリテーションプログラムを提供しています。精密な検査と評価を行うため、初診時には一定の検査時間を要しますが、この徹底したデータ収集こそが根拠ある介入の基盤となっています。

また、法制度や教育・就労現場に即した一歩「踏み込んだ」社会・行政対応を行っています。身体障害者手帳（聴覚）の判定意見書や障害年金診断書、医療費控除に伴う診療情報提供書の作成はもちろん、診断や支援が複雑な APD/LiD に関する診断書・配慮依頼書、大学入試等の合理的配慮申請書類の作成まで、患者様が社会的なサポートを円滑に受けられるよう各種文書対応を的確に実践しております。

当院では、健診で発見された軽度・中等度難聴を「加齢のせい」として看過せず、今できる最善の医学的介入を速やかに行う体制を整えています。投薬や手術で改善可能な難聴か、あるいは補聴器や人工内耳による対応が適しているかを厳密に見極めた上で、ライフステージに応じたシームレスな聴覚管理を展開しています。

具体的には、「移行期（トランジション）」にある若年層への継続的な支援をはじめ、就労世代に対しては「会議での聞き取り困難」などビジネスシーン特有の課題に応じた補聴器やワイヤレス補聴援助システムの提案により職務パフォーマンスの維持を支えます。さらにシニア世代に向けては、認知症の最大のリスク因子とされる難聴に対し、かかりつけ医や画像センターと密に連携。MRI による VSRAD 解析を組み合わせながら、専門的な療養指導を行い、聞こえの改善を通じた認知機能維持・フレイル対策に注力しています。

健診でのスクリーニングによる早期発見から専門外来での高度な臨床実践まで、大宮シティクリニック様をはじめとする地域の医療機関と強固に連携し、確かなエビデンスに基づいた難聴ケアに邁進してまいります。耳ときこえに関する課題がございましたら、些細なことでも当院へご相談ください。

【用語解説】

APD/LiD（聴覚情報処理障害/聞き取り困難症）：純音聴力検査では異常がないにもかかわらず、騒音下や複数人での会話など、特定の状況下で言葉を聞き取り、理解することが困難な状態。

実耳測定（REM）：患者様の耳の中に極細のマイクを挿入し、補聴器から実際に出ている音の大きさを鼓膜の近くで直接測定・評価する客観的な検査手法。

VSRAD：MRI 画像から脳（海馬傍回付近）の萎縮度を解析し、早期アルツハイマー型認知症の診断を支援するシステム。難聴との関連性が高い認知機能の客観的評価に用います。



〒330-0074 さいたま市浦和区北浦和1-9-5 (2F)

TEL.048-613-6614 駐車場あり



ヒアリングフレイル対策～聞こえから始める脳と全身の健康づくり～



1. 日本人の認知症リスク第1位は「難聴」

「最近、テレビの音量が大きくなった」「会議で聞き返すことが増えた」「家族に呼ばれても気づかないことがある」——こうしたささいな“聞こえにくさ”を、年齢のせいと諦めてはいないでしょうか。

2026年1月、東海大学医学部の和佐野浩一郎教授らの研究グループが日本のデータを用いて発表した国際研究で、大切なことが明らかになりました。認知症の38.9%は予防できる可能性があり、その最大の危険因子は「難聴」だったのです。聞こえの低下は、実は耳だけの問題ではなく、脳と全身の健康に関わる重要なサインといえます。

2. ヒアリングフレイル — 聞こえにくさからくる社会的な影響

ヒアリングフレイルとは、聞こえの衰えがきっかけで、コミュニケーションや社会参加、さらには認知機能にまで影響が及び始めた状態のことです。聴力は40代から少しずつ低下し始めるといわれ、ご本人が「聞こえにくい」と自覚する前から、ことばの聞き取り力は変わってきています。

やっかいなのは、本人も周囲もなかなか気づきにくいことです。「聞こえにくい」という実感よりも先に、聞き返しが増えたり、会話の輪から少し離れたり、外出が億劫になったりと、生活のなかの小さな変化として現れます。気づかないうちに進み、社会的な孤立や気分の落ち込み、認知機能の低下につながることもあります。だからこそ、早めに気づき、できることから始めることが大切なのです。

3. 今日から始める3つの対策

①加齢による難聴を正しく知る 加齢性難聴は、60代以降の半数以上の方に見られる、誰にでも起こり得る変化です。しかし「年のせい」と諦めて放置してしまうと、暮らしの質や認知機能に大きな影響が及ぶことがあります。早めに気づいて対処すれば、進行をゆるやかにすることも、認知症のリスクを下げることも期待できます。まずは正しく知ることが、対策の第一歩です。

②スマホアプリでセルフチェック スマートフォンで気軽に試せる「みんなの聴脳力チェック」を活用すれば、ご自宅でもご自身の聞き取り力を測ることができます。もし結果が80点未満であれば、ヒアリングフレイルリスクが高まる可能性がありますので、お早めに耳鼻科でご相談ください。早く気づくことが、その後の経過を大きく左右します。



③聴脳トレーニングで楽しく続ける 会話を楽しむ、本を音読する、音楽に親しむ——こうした“聴く活動”を続けることで、聞き取る力を保ちやすくなります。あわせてウォーキングなどの有酸素運動で血流をよくすることも、耳と脳の働きを支える大切な土台になります。

人間ドックなどの定期的な健康チェックにも、「聞こえ」はありますが、目を逸らしている方も多いと思います。自身の聞こえの状態を正しく知る。それがフレイル予防、ひいては認知症予防への確かな第一歩につながります。

聴脳科学者 中石 真一路
(株式会社聴脳科学総合研究所 代表取締役所長)



健康相談室だよりは当クリニックホームページにも掲載しております。バックナンバーもご覧いただけます。

ご意見・ご要望等ございましたら、遠慮なくご連絡ください

ホームページ URL : <https://www.omiyacityclinic.com/>ご意見・ご感想 : sodan@omiyacityclinic.com

健康相談室

